

## 楠の本

新年 明けましておめでとうございます。

セルロイドサロンは平成 14 年 10 月の第一回から始まりました。それから数えてこの第 157 回は 13 年目になりました。どうぞ本年も宜しくお願ひ申し上げます。

お正月には、多くの人が神社や仏閣にお参りに行きます。

東京では、正月 3 カ日に 300 万人が、年間では 1 千万人が明治神宮にお参りをするそうです。

私は明治神宮の参拝直後に、たまたま神主さんに導かれた結婚式の行列に出会いました。

お婿さんが色白・茶髪・青い目の外人でお嫁さんは日本人、参列者の数が多いのに感心しました。

日本晴の青空と緑の大木に、お婿さんの顔の色、紋付き羽織袴が良く似合っていました。

結婚式の写真や大門の写真 2 枚など、背景の楠の大木が青空に映えて見事でした。

神宮内で写真を何枚か撮りましたが、どれにも楠が写っています。

明治神宮の杜は、楠の森と言っても過言ではなかろう、と思ってしまいました。そして、売店で買った小泉宣子博士著・新潮社 2013 年 2 月発行「明治神宮、伝統を創った大プロジェクト・造営者達 12 人の挑戦」を読み更に楠に感心がいきました。

\* \* \*

大正 3 年に認められた神社奉記調査会の「明治神宮林苑計画」は、造営予定地の隣接を走る汽車、淀橋上水所、渋谷発電所の煙害にも耐え、森が約 100 年

で天然林相を実現することを目指し、次の4段階の遷移経過を予測した。

第1段階では、造営当初の1次的仮設の状態である。赤松・黒松を主木として上冠木を形成し、その間に成長の早い檜・杉等の針葉樹を植える。さらに下層に櫻・椎・楠等の常緑広葉樹を植える。

第2段階では、檜等の針葉樹が林冠最上部を占めていた松を圧倒、数10年後に最上部を支配する。

第3段階で、櫻・椎・楠の常緑広葉樹が支配木となる。これらの樹間に、杉・檜等の大木が混生する状態だ。

第4段階で、櫻・椎・楠がさらに成長し針葉樹は消滅。土地に最適の天然林相に達する。

「林苑計画」は、本多静六・本郷高徳・田村剛らによって作成され推進実行された。

本多静六は、神社奉記調査会々長・渋沢栄一に請われて「林苑計画」に参画。本多は、東京農林学校で造林植物学をドイツ人林学者ハインリヒ・マイルから学び、ミュンヘン大学に留学しカール・ガイナー教授から西洋林学について直々に享受された。帰国後、東京帝国大学林学部教授。

本郷高徳は、明治30年東京帝大農科大学入学、「当時の錚々たるドイツ仕込み」の学者・本多静六の10歳年下の造林学助手となる。ミュンヘン大学に留学、日本から帰国したマイル教授の最後の弟子になった。本郷は「林苑計画立案」から造成事業の実際に至るまで終始最前線を預かった。

明治神宮内苑は、全国各県より365種・約10万本の樹木の献上と、多くの人の勤労奉仕により5年余の造営工事が完成し、1920（大正9）年11月1日、御神靈（明治天皇・昭憲皇太后）が鎮座された。

\* \* \*

神宮内苑は、関東大震災や米軍の空爆で本殿社殿を全焼などを乗り越え、今は100年前の「林苑計画」が達成された状態にある、と理解した次第です

東京23区内は市街化が進み緑地が少なくなりました。神宮内苑の森を構成している「楠」は、吸い込んだ排気ガスを香気にかえて発散し生き続けている、と認識いたしました。



\* \* \*

昨年 12 月 28 日、セルロイドハウス横浜館にて忘年会を兼ねた昼食会がありました。平井英一さん（右写真）も出席していました。そこで、法政大学出版局発行「楠」109 頁の次の文が話題になりました。



『戦前は、東京都葛飾区や足立区に文具や玩具産業が盛んで、海外にも輸出されて、戦後も人形やお面、鯛や恵比寿など正月飾りや縁起物など細々とつくられていたが、セルロイドの可燃性が問題になり、アメリカ向け輸出が止り、塩化ビニールに代えられてしまった。

硝化綿に樟脳を混ぜて作ったセルロイド板を熱した金型にはさみ、プレス機にかけながら空気を送り込んでセルロイド板をふくらませ、水で冷却する。それをラッカーで彩色する。

今この職人は日経新聞によれば、東京都足立区で三代にわたり玩具製造業を営む平井英一さんだけというからさびしいかぎりである』



この本はタイトル通り「楠」のことが大半を占めますが、樟脳専売や製法、樟脳とセルロイドの関係、セルロイドの発明と発展、セルロイドのキューピーさん、樟脳船、クスノキとフィルムの項目、ハイアット、ドイツの合成樟脳、ダイセル、富士フィルム等々も図面と写真が挿入してあるので分り易く、特にセルロイド関係者には大変興味がもたれます。

1724 (宝歴 4 年) 樟脳製法：くすの木と云もの二品あり、樟は木の心赤黒く香りよし、楠は香り少なく木の心赤黒からず、これには大木多し、腐りて岩と成るなり。樟脳は樟の根を取り、そのコケラを釜にて蒸するなり、・ ・ ・ ・ ・ 釜の蓋は鉢なり。釜と鉢との間を土に塗りて、いきの出ざる様にするなり。その蓋へ溜りたる露すなわち樟脳なり。ここでは楠と樟をはつきり区別している。その方法が土佐や薩摩から伝わって進歩したことが伺われる。

\* \* \*

「楠」著者の矢野健一・高陽氏は親子で共に伊勢神宮に奉職されておられます。セルロイドハウス横浜館は、現在、35 千点のセルロイド製品を収蔵していますが、更にセルロイド原料の綿、樟の現物も揃えたいと思いました。

(了)